京都大学	博士(文学)	氏名	永　畑　紗　織
論文題目	ボブロフスキーと失われた故郷		

（論文内容の要旨）

第二次世界大戦の敗戦により、ドイツは戦前の領土の4分の1を失った。この時ソ連やポーランドに割譲することとなった土地は、総称して東方領土と呼ばれる。東方領土に住んでいたドイツ人たちは、ソ連軍の攻撃を恐れて逃亡するか、あるいは追放されて故郷を離れることとなった。4人に1人のドイツ人が故郷を喪失するという大きな出来事であったにもかかわらず、戦後のドイツには、この出来事について語ることを躊躇する雰囲気が存在した。

規制が厳しく、この出来事について語るのが特に難しかった1960年代のDDR（東ドイツ）で、故郷喪失というテーマに取り組んだのが、本論文で扱うヨハネス・ボブロフスキーである。彼は、東西両ドイツで受け入れられた稀有な作家であったが、本論文の序章では、東西両ドイツにおける逃亡・追放・故郷喪失をめぐる文学状況を踏まえた上で、彼がDDR当局と摩擦を起こさなかった理由と、東西両ドイツで人気を博した理由を考察する。

彼は、自分自身、故郷喪失者だったが、領土喪失を東欧諸民族に対してドイツ人が犯した罪の代償と捉え、ドイツ人の罪を明らかにすることを意図して執筆活動を行った。東欧諸国の反発を招くことのない彼の姿勢は、DDR当局にとっては受け入れやすいものであり、また牧歌的な印象を与える彼の作品が、政治的に不穏当な発言が隠されているように見られることはなかったのだろう。

他方、故郷というテーマがほぼタブーであった1960年代のDDRに暮らす故郷喪失者の多くは、故郷の記憶を呼び覚ましてくれる文学作品や故郷喪失というテーマに取り組む文学作品を渇望していた。ボブロフスキーの作品には謎めいた不明瞭な表現が溢れている一方で、彼が東方の故郷の風景や故郷への愛情を作品に織り交ぜていることは誰の目にも明らかだった。DDR国家や東欧諸国との摩擦を起こさない形で故郷というテーマを扱う彼の作品は、待ち望まれたものだったと言える。

東方領土の奪回は事実上不可能だという認識が広まりつつあった1960年代のBRD（西ドイツ）では、「東方領土はドイツのものだ」という考え方から脱却するための、説得力ある見解が必要とされ始めていた。東方の地においてドイツ人たちが東欧諸民族に対して犯した不正の長い歴史に目を向けて故郷の問題に取り組んだボブロフスキーの作品には、社会的な需要があったのである。

21世紀に入って10年余りが経過した現在では、さまざまな状況の変化の中で、逃亡・追放・故郷喪失について以前より語りやすい雰囲気が生まれつつある。その流れを受

けて、ドイツ国内におけるボブロフスキーへの関心も高まりをみせている。そのため、今、ボブロフスキーの作品解釈に取り組むことには、一定の意義があると考えられる。

本論文は、比喩的・暗示的な言葉の中に隠された彼の故郷に対する想いがどのようなものであったかを解き明かすことを目的とし、主に1962年9月から1964年3月までの間に書かれた5つの短編を扱うものである。文学者として名を馳せてからのこの時期に書かれた作品には、政治的思惑と無縁と思われる初期の作品や、政治的に受け入れられることを意識した頃の作品に比して、自分の置かれた状況に対する感情や自分の信念が最も強く表れている。ボブロフスキーは自然詩人としてみられることも多いが、本論文は、彼の社会的側面、特に故郷喪失者としての側面に焦点をあてようとするものである。また、社会的側面といっても、単に社会貢献する優等生作家としての彼にのみ注目するのではなく、悩みや現状への不満、欲望を持ちながら、より良い世界を夢想する、社会の中に生きる一個人としての彼の姿を浮き彫りにしようとする試みである。

第一章では、ドイツ人としての罪の意識と世界の「不明瞭さ」の認識が、故郷の問題に対するボブロフスキーの基本的なスタンスであることを明らかにするべく、第二次世界大戦初期のポーランドを舞台にした『ねずみのおまつり（*Mäusefest*）』（推定1962年9・10月成立）を扱う。ユダヤ人と若いドイツ兵が登場するこの短編は、「ドイツ人と東欧諸民族」というテーマを扱っていることが誰の目にも明白な作品のひとつである。そのため、ボブロフスキーの基本的なスタンスを捉えるには最適な作品なのだが、本章では、その基本的なスタンスを、すべてのことが容易に合理的には説明され得ないと考える反啓蒙の思想家ハーマンの影響として捉えようと試みる。ボブロフスキーは、単純化された枠組みを用いて安直な結論へと導くことをよしとしなかった。現実は不明瞭で複雑なものであり、決して単純でクリアなものではないという、ボブロフスキーの考え方が、この短編のベースになっている。そしてまた、この考え方からは彼の故郷に対する想いも推測することができる。つまり、民族と民族の境目も国と国との境目も本来、曖昧なものであるというのが彼の理解である。だが、本来は不明瞭である世界を主題としながらも、この短編に描かれているのは、民族と民族の境目が無理やり明確化されようとした時代である。そして、たとえ直接的には何もしていなくても、ドイツ人である以上、罪を負っているのだという認識が、ユダヤ人に対して何をするわけでもなく去っていったにもかかわらずユダヤ人を脅かすこととなるドイツ兵の姿を通して描かれている。

第二章では、『異教徒たちの至福（*Die Seligkeit der Heiden*）』（1964年3月18日以降完成）を扱う。キエフの地のキリスト教化の過程で起こった988年の出来事を描いたこの短編は、ボブロフスキーの関心が時間的にも空間的にも広範囲に及んでいたことや、彼が歴史的事実に基づいて創作を行っていたことを示す好例である。キエフの地では土着の神々が信仰されていたが、キエフ大公国のウラジーミル1世は、キリス

ト教を国教化することを余儀なくされ、土着の宗教を排斥することとなる。これを象徴する出来事が、この短編中で描かれる異教の神ペルーンの追放である。ボブロフスキーにとって重要だったのは、民間においてはしばしば旧約聖書中の預言者エリヤとペルーンが同一視されてきたという事実、つまり、異教とキリスト教の境界もさほど明白なものではないということだった。ボブロフスキーは、東欧諸民族が暴力的に変化を強いられた典型的な例として、この出来事に着目し、本来、多様なものが絡み合いながら調和していた世界が、国家の暴力によって画一化されていくことへの批判を、この短編にこめた。その批判は、千年も前のキエフ公国だけではなく、共産主義政権にも向けられているというのが、本章の主張である。多文化・多民族が共存していた自らの故郷への愛情と、多様性を許さない国家への不満が、この短編のベースになっている。

第三章では、『立ち去りたい —— 七つの声のための物語（*Ich will fortgehen – Erzählung für sieben Stimmen*）』（1963年7月か8月完成）を扱う。ラジオ・ドラマ用に書かれたこの作品には、何が言いたいのか非常に分かりにくい展開が与えられている。この作品に盛り込まれた、一見すると何の関連性もないように思われるバラバラなモティーフは、しかし、「立ち去り」というテーマによって結ばれている。本章では、この作品の中の、ヘルミーネという少女が登場する場面を詳細に分析する。この場面の登場人物たちの名前や描かれ方、その他のモティーフを検討すると、ノスタルジックな歌がこの場面のライトモティーフとなっていること、ヘルミーネがドイツ・ナショナリズムを象徴する存在であること、この場面に作者の体験が反映されていること、この短編が自ら犯した罪のためにドイツ東方領土から立ち去らなければならない者を描いたものであることが明らかになる。本章の解釈に従えば、この作品の中では、ドイツ人を象徴しながら東欧の他民族を象徴する者と親戚関係にあるヘルミーネは、他民族を象徴する金魚を無邪気さゆえに苦しめ、その結果として故郷からの立ち去りを強いられる。表面的に読むと分かりにくいものの、実はドイツ人と東欧諸民族の関係というテーマを扱う作品なのである。この作品の極端なまでの不明瞭さは、「逃亡・追放」という非常に扱いづらいテーマを取り上げるためのものであろう。

第四章では、短編『窓辺の若い紳士（*Junger Herr am Fenster*）』（推定1963年8・9月成立）を扱う。父の自殺後のショーペンハウアーをモデルにした若い紳士を主人公とするこの短編は、これまでの先行研究では、主に「芸術家の生」を主題とする作品として読まれてきたが、本章では、第二次世界大戦敗戦により故郷からの立ち退きを強いられた東方ドイツ人たちの心理を描いたものとして読み解く。作品の舞台は、ショーペンハウアーの生まれ故郷ダンツィヒである。主人公の若い紳士は、父の自殺の原因のひとつは母にあると考え、母への復讐を妄想するのだが、父の死にまつわるスキャンダルのせいで母と妹は町を離れなければならず、若い紳士もおそらくその後を追わねばならない。つまり、この作品でも逃亡・追放がテーマになっているのである。ショー

ペンハウアーの伝記によれば、彼は父を尊敬していたが、母に対しては批判的だった。しかし父の死のおかげで、商人にならずに、物書き・哲学者としての人生を歩むことができた。商人だった父の側ではなく、後に作家となる母の側へ進んだということである。この伝記的事実に、ドイツの罪のせいで故郷が失われたにもかかわらず、ドイツで生きていかねばならなかったボブロフスキーの人生が象徴的に重ねられている。ボブロフスキーはドイツで作家としての名声を得たわけだが、故郷喪失の原因を作ったドイツに対する感情は複雑なものであっただろう。『窓辺の若い紳士』は、ドイツと東方の故郷の双方に属する人間の立場の微妙さを描いた作品なのである。

第五章では、『D.B.H.』(推定1963年8・9月成立)を扱う。バロック期の音楽家ディートリヒ・ブクステフーデを主人公に据えた『D.B.H.』は、彼が故郷を去った後のドイツでの生活を主題とし、これまでも「故郷への想い」を描いた作品として読まれてきたが、本章では、これまでは注目されてこなかった『D.B.H.』というタイトルに込められた意味を探ることに主眼を置く。ブクステフーデは罪を犯してデンマークの故郷から立ち去らねばならなくなり、ドイツのリューベックの地で音楽家としての名声を得た人物であり、ボブロフスキーは故郷とドイツのはざまに立つ彼に自分を重ねたのである。本章では、ボブロフスキーがブクステフーデにどのようなイメージを抱いているかを知るために、ブクステフーデの内的独白として書かれたボブロフスキーの詩『挽歌』も参照するが、この詩の解釈により、ブクステフーデはプロテスタント教会のオルガニストでありながら、異教世界とも関連付けられていることが明らかになる。また『D.B.H.』には、「Bogen（アーチ)」という言葉が何度も出てくるが、この言葉がこの短編の主題を読み解くキーワードになっていることも指摘する。つまり、作品を通して、キリスト教世界と異教世界、ドイツと故郷、ドイツ人と諸民族、現実と理想などふたつの世界の架け橋になるというボブロフスキーの意志がこの短編には描かれているのである。

これら五つの短編は、相互に強く関連し合っている。例えば、五つの短編すべてに「光」というモティーフが登場するが、作品を並べて読んでみると、ひとつの作品を単独で読んでも見えてこない「光」の意味合いが見えてくる。『ねずみのおまつり』における白い光の脅かしの力を踏まえなければ、『立ち去りたい』が何を言わんとする作品であるかは不明瞭なままだったはずである。「光」のモティーフに限らず、『立ち去りたい』と『窓辺の若い紳士』に共通する「窓」、「白いリボン」、「立ち去り」、「復讐」という四つのモティーフも、このふたつの短編の理解を助けるし、『挽歌』におけるブクステフーデ像を理解するには、『異教徒たちの至福』で扱われる題材へのボブロフスキーの関心を踏まえることが不可欠である。また、『立ち去りたい』と『窓辺の若い紳士』と『D.B.H.』のそれぞれに登場する音楽には、その作詞あるいは作曲に関わった人物が故郷からの立ち去りを経験しているという共通点があり、この共通点が、これら三つの短編がすべて逃亡・追放と関連しているという解釈を確かなものにしている。

つまり、ボブロフスキーのテクストを解読する上では、間テクスト性が重要であるということが、本論文における、この五つの短編の解釈を通してみれば明白になるのである。

五つの短編の舞台を年代的に総括すると、── いつどこが舞台なのかのほのめかしが一切なされていない『立ち去りたい』は脇に置いておいて ── 紀元10世紀、17世紀、19世紀初頭、第二次大戦初期と、幅広い年代にボブロフスキーが関心を持っていたことが分かる。そして、その各々が、キエフ公国のキリスト教国教化、三十年戦争、ナポレオン戦争、第二次世界大戦という歴史的に大きな出来事を背景に持つ時代である。また、地理的にみると、──『立ち去りたい』はさておき ── キエフ、リューベック、ダンツィヒ、ポーランドのどこか、と東欧から北ドイツにかけての地域が舞台になっていることが分かる。

地理的・年代的には幅広いところから題材がとられているとはいえ、この五つの短編にはすべて、故郷への想いが描きこまれている。その「想い」の中には、国家によって暴力的に引かれた境界への不満や、故郷喪失という形で罪の報いを受け続けなければならないことへの不満といった、表立っては口にできないものも含まれている、というのが本論文の解釈である。

（論文審査の結果の要旨）

本論文は、第二次大戦後のDDR（ドイツ民主共和国）で執筆活動を行い、東西両ドイツにおいて作品を発表した作家ヨハネス・ボブロフスキー（1917−65）の文学を、「失われた故郷」という視点から考察したものである。リトアニアと国境を接する東プロイセンの町ティルジットで生まれ、少年時代は祖母の住むリトアニアのモチシュケン村で夏休みを過ごし、第二次大戦におけるドイツの敗戦によって故郷を失ったボブロフスキーの詩や散文作品には、失われた故郷としての東欧世界を描いたものが数多く見出される。こうした点から、従来の研究においては、この作家を自然詩人として捉えようとする傾向が強かったのに対して、論者は、これらの作品のうちに、ドイツ人と東欧諸民族との関係という社会的な問題意識を読み取ろうとする。第二次大戦後の東西両ドイツには、敗戦による故郷の喪失という出来事について語ることを躊躇する雰囲気があった。とりわけ規制の厳しかったDDRにおいて、ボブロフスキーは、比喩的で暗示的な言葉によって、故郷への想いを語ると同時に、ドイツ人が東欧諸民族に対して犯した罪を問いなおそうとした、というのが論者の主張である。こうした視点から、論者は、1962年から64年までのあいだに書かれた5篇の短編小説に焦点を絞り、そこに共通してあらわれるモティーフに着目することによって、難解で謎めいた表現のうちに隠された作家の故郷への想いを読み解こうと試みるのである。

第一章では、第二次大戦初期のポーランドを舞台にして、年老いたユダヤ人と若いドイツ兵との出会いを描いた作品『ねずみのおまつり』（1962）が取り上げられる。論者は、ボブロフスキーが18世紀の反啓蒙主義の思想家ハーマンから受けた影響をふまえて、この作品における「光」と「闇」、そして「白」のモティーフを読み解いてゆく。すなわち、この作品で描かれているのは、本来曖昧であるはずの民族間の差異が、無理やり明るみに出されようとした時代であり、若いドイツ兵のうちには、作家自身のドイツ人としての罪の意識が書きこまれているという。

第二章では、10世紀にキエフの地がキリスト教化されたさいに、異教の神ペルーンの偶像がドニエプル川へ投げ込まれたという出来事を素材にした作品『異教徒たちの至福』（1964）が論じられる。論者は、ボブロフスキーが参照した『ロシア原初年代記』とこの作品を比較し、前章でも論じられた「光」と「白」、そしてさらには「赤」のモティーフを分析することによって、ボブロフスキーの批判が、多様な宗教や民族が共存する社会を暴力的に画一化しようとした千年前のキエフのみならず、同時代の共産主義政権にも向けられていたと主張する。

第三章では、もともとラジオ・ドラマの台本として書かれた作品『立ち去りたい ――七つの声のための物語』（1963）のなかの、ヘルミーネという少女が登場する場面が詳細に分析される。論者は、作中で演奏される『久しき昔』の歌詞、ヘルミーネとフェルディナントという登場人物の名前、そして、この作品にもあらわれる「光」と「白」のモティーフを手がかりにして、ここでもまた、ドイツ人と東欧諸民族とのあいだの

関係が主題化されていることを明らかにする。ドイツ人の少女ヘルミーネは、それと知らずに犯した罪によって、故郷からの立ち去りを強いられるのである。

第四章では、若き日の哲学者ショーペンハウアーをモデルにした作品『窓辺の若い紳士』(1963) が扱われる。従来の研究においてこの作品が、「芸術家の生」という視点から解釈されてきたのに対して、論者は、「窓」、「光」、「白いリボン」、「立ち去り」といった、前章で論じられた作品と共通するモティーフに着目することによって、ここにもまた、第二次大戦での敗戦によって故郷からの立ち退きを強いられた東方ドイツ人たちの心理を読み取ろうとする。父の死によって故郷ダンツィヒを立ち去らねばならず、その罪を自分自身にではなく、母に着せようとする主人公のうちには、故郷喪失の原因を作ったドイツに対するボブロフスキー自身の屈折した想いが投影されているという。

第五章では、17 世紀の音楽家ブクステフーデを主人公とした作品『D.B.H.』(1963) が考察される。この作品は、従来から「故郷への想い」を描いたものとして読まれてきたが、論者はそのタイトルについて新しい解釈を提示する。すなわちここでは、青年期まで過ごしたデンマークを立ち去って、ドイツのリューベックで音楽家としての名声を得たブクステフーデと、故郷とドイツのはざまに立つボブロフスキー自身が、「B.」として重ねあわされ、ドイツ (Deutschland) と故郷 (Heimat)、キリスト教世界と異教世界、現実と理想とのあいだの架け橋になりたいという作家の願望が、この作品には託されているのである。

ボブロフスキーが残した作品のなかでは、3 冊の詩集と 2 篇の長編小説が比較的よく知られているのに対して、彼の短編小説は、その難解さのゆえに、これまで本格的な研究の対象となることが少なかった。本論文は、それぞれ異なった時代と土地を舞台とする 5 篇の短編小説を、「失われた故郷」という共通のテーマのもとに読み解くことによって、ドイツ人が東欧諸民族に対して犯した罪と、その結果としての故郷喪失という問題意識が、遠い過去から現在へといたる広大な歴史的展望をともなって、ボブロフスキーの文学をつらぬいていることを浮き彫りにした点において、高い価値をもつものである。

むろん、本論文において論者が取り上げた作品は、ボブロフスキーの著作のなかの一部分にすぎない。だが、論者がここで実践している、「光」と「闇」、「色彩」と「音楽」といった共通のモティーフを手がかりにして、ボブロフスキーの作品を間テクスト的に読むという研究方法とその成果は、論者のボブロフスキー研究が、今後さらにスケールの大きいものへと発展してゆくことを期待させるものである。

以上、審査したところにより、本論文は博士 (文学) の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2012 年 2 月 8 日、調査委員 3 名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。